

《復習》No.51を参照せよ。奴隷王朝→ハルジー朝→トゥグルク朝→サイド朝→ロディー朝

## ムガル帝国の繁栄

インド史上最大のイスラーム王朝

- 1) 14世紀末、トゥグルク朝の時、ティムール朝 1370-1507 の侵攻を受け、デリー=スルタン朝の支配力は弱まり、各地に政権が分立した。

カビール（後述）の活躍も、彼の影響を受けたナーナクがシク教を創始（後述）したのも1)と2)《初代》の間の時期である。

- 2) ムガル帝国の歴史を君主ごとに見ていこう。

《初代》ティムールの子孫【1: \_\_\_\_\_】(1483-1530)は今日のウズベキスタンのサマルカンドを占拠していたが、1500年、シャイバーニー朝（シャイバニ朝あるいはシャイバーン朝）にサマルカンドを奪われ、今日のアフガニスタンのカーブルに移動した。シャイバーニー朝によってティムール朝が滅亡(1507)した後は、ティムール朝再興を目指した。

1526年、アフガニスタンのカーブルで勢力を増したバーブルは、北インドに侵入し、【2: \_\_\_\_\_】でロディー朝（デリー=スルタン朝の5番目の王朝）を破りムガル帝国を建国した。都は【3: \_\_\_\_\_】。《頻出》

アグラが首都になるのは1558年、アクバルの時である。

しかし、バーブル 在位1526-1530 はムガル帝国の指導者としては4年しか在位せず、実質的建国者は孫のアクバルである。

なお、ヴァスコ=ダ=ガマのインド西南部、カリカット（現コジコデ）への到達（1498年）は、ムガル帝国建国（1526年）より前である。当時カリカットはヴィジャヤナガル王国の治下にあった。

バーブルは回想録『バーブル=ナーマ（バーブルの書）』を著した。チャガタイ・トルコ語で書かれており、チャガタイ語散文学の最高傑作とされている。同時に、公用語であるペルシア語から多くの言い回しや詩をその文章の中に取り入れている。16世紀末にペルシア語に翻訳された。

《第2代》フマーユーン（位1530-1540、1555-1556 バーブルの長男）の時、16世紀半ば、無理な外征から内乱が起き、ムガル帝国は一時中断した。都は引き続きデリー。彼自身とその息子アクバル（バーブルの孫）が復活させ、アクバルの治世下に全盛期を迎えた。

《第3代》【4: \_\_\_\_\_】位1556-1605 は、実質的には建国者である。都を【5: \_\_\_\_\_】に遷した。

図1で点線囲いは即位時、縦線の領域は死亡時の領土である。遅くとも1576年までに北インドを統一した。以下その業績である。

イギリスのエリザベス1世が東インド会社を設立した（1600年）のも同時期である。

- ①【6: \_\_\_\_\_】を行ったとされる。……州・県・郡を置き、官吏（文官・武官の区別はない。以下同じ）を派遣して中央集権化を進めた。皇帝に仕えるものを、皇帝が与えたマンサブ（位階）で序列化。各マンサブに応じた騎兵や騎馬の準備を義務づけ、俸給を与える制度。マンサブの保有者をマンサブダールという。アクバルは当初、マンサブ保有者に対する俸給を金銭で支払おうとしたが、反発が強かったために徴税権を認めた給与地（ジャーギール）を与えることにした。この制度が【6】であり、これを「マンサブダリー制」とは受験では言わない（厳密には誤りではない）。

マンサブに応じて「俸給」の代わりに給される徴税権付きの一定の土地をジャーギールと言う。官吏はジャーギールに見合った数の騎兵を養い、帝国の危急にはそれを提供しなければならなかった。なお、厳密には、ジャーギールは土地そのものではなく、土地からの徴税権であり、行政は地方行政官が行った。プワイフ朝、セルジューク朝以来のイスラーム世界でのイクター制、オスマン帝国のティマル制にほぼ相当する。ジャーギールは官僚の土着化、封建領主化を阻止するため、3、4年ごとに所替え（つまり転任）された。この面から見て、これをジャーギール制と呼ぶこともある。

- ②綿密な土地測量で地租の税率を定め、財政基盤を固めた。徴税は官吏が行うが、【7: \_\_\_\_\_】と呼ばれるヒンドゥー教徒の領主層が支配する地域では、彼らを徴税請負人に任命した。これはザミンダリー制とは呼ばない。

ザミンダリー制は1793年、イギリスがベンガル・ビハールに導入、北インドで行われた土地税徴収制度。

- ③ヒンドゥー女性を妻とし、カースト（ジャーティー）の上位である北西部の【8: \_\_\_\_\_】（ヒンドゥー系）との融和を図った。婚姻関係を結んで軍に取り込んだ。

ラージプートとは、8～12世紀に身分制度として固定化された上層カースト。古代クシャトリアの子孫と自称。

- ④【9: \_\_\_\_\_】（人頭税）を廃止（1564）してヒンドゥー教徒との和解に努めた。

これより150年間はムガル帝国全盛期である。ポルトガルのカリカット到達（1498）以降、ヨーロッパ諸国の艦隊や商人が来航したが、17世紀半ばまではヨーロッパ諸国はムガル帝国に手も足も出せなかった！ 彼らは皇帝の許可を得て通商拠点を確保したにとどまった。

《第4代》ジャハンギール 位1605-27、アクバルの宗教寛容策を踏襲

《第5代》【10: \_\_\_\_\_】位1628-58 は、都をデリーに戻し、「赤い砦」と呼ばれるデリー城を建設し、デリーを大きく拡張した。シャー=ジャハーンとは「世界の王」という意味で父帝から与えられた称号である。彼は14人目の子を出産して亡くなった愛妃ムムタズ=マハル（愛称タージ）の死（1631年、享年推定38歳）を悼んで、アグラ東郊、ヤムナー川右岸に【11: \_\_\_\_\_】※を建設した（1653年完成）。インド=イスラーム建築の最高傑作とされる。

この【8】のころがインド=イスラーム文化の最盛期である。

※【11】は、デリーではなくアグラの近郊にある。造営は1632～53年。22年の歳月、世界中から集めた2万人の職人、「象千頭で運んだ石材」！高さ58mもある白大理石のドームと泉水の庭園が特徴。居城であるアグラ城から遠からぬヤムナー川の右岸に建つ。ムガル朝の第2代皇帝、フマーユーンの廟（1565、デリー郊外）がモデルだ

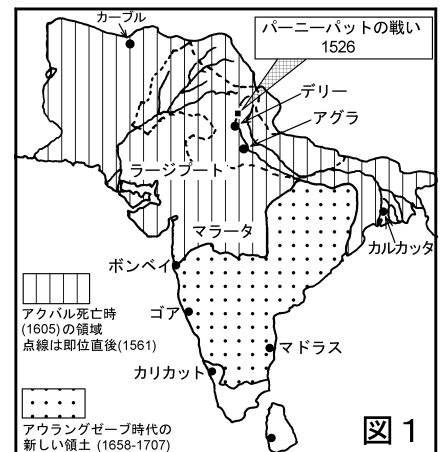


図1

が、これをはるかに凌ぐ。シャー=ジャハーンはヤムナー川の対岸に黒大理石の自らの廟を築く計画を持っていたが、1658年以降、三男（アウラングゼーブ）に豪華な塔に幽閉され、タージ=マハルを遠望して泣き暮らし、1666年死亡。遺体はタージ=マハル内の愛妃タージの隣に埋葬された。

なお、ヤムナー川はガンジス川最大の支流で、アグラの約600km下流で合流する。アグラより上流のヤムナー川右岸に面してデリー（オールドデリー）があり、その西隣にニューデリーがある。今日、生活排水の大半が未処理で流入し、水質はきわめて悪い。デリーの北北西方向約80kmにパーニーパットの古戦場がある。

《第6代》【12: 】位1658-1707 版図最大に達す。この項はNo.148で詳しく述べる。

第5代シャー=ジャハーンの子。父を幽閉して即位。治世の大半をデカンの平定に注いだ。

以下は、アウラングゼーブの業績ないしは治下に起きた出来事である。

- ①外征に専念して最大の領土を得たが、**財政は悪化、反乱が起きて帝国衰退の原因**をつくった。
- ②厳格なスンナ派で、シーア派ムスリム、ヒンドゥー教徒、シク教徒等を弾圧し、ヒンドゥー寺院を破壊した。1679年、非イスラーム教徒に対する【13: 】（人頭税）を復活した。
- ③北インドではラージプート族（ヒンドゥー勢力）、シク教徒（後述）が反旗をひるがえし、抑圧政策に激しく抵抗した。  
シク教徒の反乱(1710)は厳密にはアウラングゼーブ死後である。
- ④デカン高原ではマラーター族の反乱が起きた。  
マラーターとは、マハーラーシュトラ地方（デカン高原西部）の農業に従事するカースト集団。ヒンドゥー教の中でも【14: 】（後述）に帰依しており、反ムガル運動、後には反英運動の中心になった。1674年に【15: 】17世紀中ごろ-1818 成立。指導者は【16: 】即位1674。ムガル帝国と抗争しながら発展した。
- ⑤帝国の拡大で軍人や官僚が増加したが、彼らに支給する《徴税権付きの土地》が不足し、マンサブダール制は実施できなくなった。ジャーギールダール制を行ったとされる。地方にはザミンダール（領主層）が台頭した。

《第6代以降》 18世紀、アウラングゼーブ死去(1707)以降諸勢力が自立する傾向を強め、特にムガル帝国宰相アーサフ=シャーがデカン高原にニザーム王国（ハイデラバード王国、首都ハイデラバード）を建てた1724年以降は、帝国は解体に向かった。さらに南インドにマイソール王国が急成長。イランのトルコ系王朝、アフシャール朝（1736-96）の侵入で、ムガル帝国はデリー周辺のみ的小国に転落し・[No.148参照]・1858年名実ともに滅亡した。

## インド=イスラーム文化

ムガル帝国時代にイスラーム教は全インドに広まった。

- 1) 15~16世紀、スーフィズムの影響を受けて、神への信愛と献身によって、あらゆるカーストの人々が救われると説く【17: 】がヒンドゥー教徒の間で広まった。  
バクティ信仰とは、起源は5~6世紀。7世紀チャールキヤ朝、パッラヴァ朝、パーンディヤ朝の3国が抗争する南インドで大衆化。仏教、ジャイナ教を否定、知識も苦行も否定、シヴァ神、ビシュヌ神などに絶対的帰依を捧げひたすら歌い踊る。受験的にはパッラヴァ朝はその震源地のように扱われ、その首都カーンチーはヒンドゥー教七大聖地の一つとされる。バクティ信仰は、14、15世紀には北インドに広まり最盛期を迎え、クリシュナ神、ラーマ神信仰と結びつく。これらヒンドゥーの神々への献身、絶対的な帰依が特徴で、ヴァルナ=ジャーティー制（カースト制）に反対した。
- 2) イスラームの【18: 】や聖者崇拜もヒンドゥー教徒の女性・職人・下層農民などに広まった。バクティ信仰のヴァルナ=ジャーティー制反対とスーフィズムの平等思想は、相通じるものがある。
- 3) 前述1)2)を背景に、ヒンドゥー教・イスラーム教の両教に通じ、神は根本において同一であるとして、ヒンドゥー教（バクティ信仰）・イスラーム教の融合をはかった【19: 】1440-1518? は、いわゆる「不可触民」に対する差別を否定し、宗教改革者としての面を持つ。2014慶應義塾(法) 彼は読み書きができなかったが、日常の平易なヒンディー語の方言で口述した数多くの詩や箴言は、弟子の手で『ビージャク(真理の宝庫)』としてまとめられ、シク教の開祖ナーナクに多大の影響を与えた。《頻出》
- 4) ヒンドゥー教・イスラーム教の両教に通じた宗教指導者、【20: 】1469-1538は、カビールの影響も受けて、16世紀初めに【21: 】を創始した。【21】は、ヒンドゥー教（バクティ信仰）をベースに、イスラーム教の影響を強く受けた新宗教で、パンジャブ地方を中心に普及した。一神教的で、偶像やヴァルナ=ジャーティー制を否定し、苦行を禁止した。総本山はパンジャブ地方のアムリットサルにある黄金寺院である。教典は『グル・グラント・サーヒブ』と呼ばれる1430ページの書物であり、今日では英訳されインターネットでも公開されている。ムガル帝国の圧迫を受けて軍事化し、19世紀にはパンジャブ地方にシク王国を建てた。19世紀半ば、イギリスとの2度の戦争に敗れ、イギリスの支配下に置かれた。  
シク教徒は、ヒンドゥー教徒に比べて、圧倒的に少数派だが、富裕層が多く社会的な影響力は小さくない。シク教徒の男性は、髪の手と髭を切らず、頭にターバンを着用する習慣がある。髭のあるターバンをつけたインド人男性はシク教徒である。イギリスでは、ターバンをするため、バイクの運転の時、ヘルメットを免除されている。ターバンの着用はヒンドゥー教徒などでは一般的でないにもかかわらず、世界的にはインド人男性の一般的なイメージとなっている。シク教は成立時より裕福で教養があり教育水準の高い層の帰依が多かったことから、イギリス統治時代のインドでは官吏や軍人として登用されるなど社会的に活躍する人材を多く輩出し、職務等で海外に渡航したインド人にターバンを巻いたシク教徒が多く見かけられたためだろう。アニメ世界名作劇場の『少公女セーラ』(原作はイギリス、1887年)でもインド人はターバン着用である。
- 5) イランから伝来した細密画がムガル帝国で発展したものがムガル絵画。ラージプート絵画もその影響を受けている。バクティ信仰の中心となるクリシュナとラーダを描いたラージプート絵画は見ておこう。
- 6) ムガル帝国の公用語はペルシア語だが、北インドの民衆はヒンドゥー語を話す。これを基礎にペルシア語とアラビア語の文字と語彙を採用した混生語がウルドゥー語でムスリムが使い、現パキスタンの「国家語」。ヒンドゥー語とウルドゥー語の話者は概ね相互に理解可能。現インド連邦政府の「指定言語」は、ヒンドゥー語・ウルドゥー語も含めて22。